

幼児の粘土を用いた造形活動の支援についての研究（1）

- 環境設定に着目して -

三浦 乃 [鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター研究協力員]
小江 和 樹 [鹿児島大学教育学系(美術教育)]

A study of the support in formative activity using clay for infants (1)

- Focusing on the preferences -

MIURA Nai · OE Kazuki

キーワード：幼児造形、粘土、環境設定

1. はじめに

幼児の粘土を用いる立体造形の表現の発達に關する先行研究⁽¹⁾において、その特徴として以下の5点が明らかとなった。

- ① 幼児期全般に共通する、基本形や器状の造形物などの普遍性
 - ② 平面的な造形物や性差、幼児期全般における感覚的な関わりへの欲求と造形への欲求の存在の両存
 - ③ 幼児後期に向かうにつれて造形意図と造形が結びつき、感覚的な関わりから創造的な関わりへと活動の質が変化する、活動の質的轉換の存在
 - ④ 粘土の様々な状態の体験による、造形体験の充実化、粘土との関係性づくり、自己表現との対話の促進の可能性
 - ⑤ 活動の質的轉換に伴う道具の使用方法の変化
- ⑤に関しては、造形意図と操作が結びつく幼児はその機能を効果的に使用することができるが、感覚的な関わりを楽しむ幼児は操作そのものが主になり、粘土との直接的な関わりが減少してしまうことが明らかとなっている。

また、これらのことを踏まえ、幼児の粘土を用いた造形活動における支援や指導のポイントとして、以下の3点が挙げられた。

- ① 幼児の表現の多様性に於ける支援や指導における、多量の粘土を用いる環境設定の有用性
- ② 幼児の粘土造形への興味や関心、意欲の向上と自己表現の選択に向けた、状態の変化を体験する活動の有意性

③ 道具の使用を表現方法に合わせて選択できる環境設定や、機能的な使用に向けた支援や指導方法の十分な考慮

②に関しては、活動の場に粘土の水分量を調節できる設定を行うことも有用であるといえる。東山(1999)は、子どもの諸発達、それに伴う造形活動の発達と同時に、体験が充実することでこれらの領域は互いに高めあうことができると述べている。よって、このような体験の充実に向けた支援が、子どもの表現の更なる発達につながると推察できる。

これらのポイントを踏まえて、活動やその場を構築する際、粘土造形自体の取扱いの難しさを示唆する先行研究(神谷, 2009)に見られるように、運営や管理などの現実的な問題をもちやすい可能性は自明である。そのため、そのようなポイントをもつ活動の実践や、環境などについての具体的な条件付けに関しては、あまり研究がみられない。しかしながら、幼児の実態に即した効果的な造形活動の支援を考える上で、このポイントの具体化や普遍性を見出すことの重要度は言うまでもない。

そこで本研究では、幼児の多様な発達や表現の姿に沿い、効果的な支援を行うことのできる粘土造形の環境設定について、先行研究の中から、実際に多量の粘土を用いる粘土造形の具体的な活動設定を試みた「粘土場」について調査を行い、その支援に関する具体的なポイントを見出し、支援や指導の足掛かりにすることを目的とする。

2. 先行研究に対する見解

本研究では、先行研究で述べられた支援のポイントが包括されている前嶋英輝の「粘土場」の研究及びそれに伴う実践に注目した。「幼児造形教育のための粘土場による実践」(2007)によると、前嶋は10年間に及ぶ粘土遊び教室の経験から、子どもの粘土遊びへの意欲や集中力、大量の粘土への興味を読み取り、砂場のように存在する粘土場の価値を見出した。そして、2007年6月に岡山県の高梁中央保育園にて、常時使用可能な土粘土500kg、粘土槽に200kgの土粘土を用意し、幼児が裸足になって一年中自由に大量の粘土を用いて遊ぶことができる「粘土場」を開設した。

先述した研究は、「内触覚性を伴った造形活動ができるための子どもたち自身のプロジェクトとして、粘土遊びを実践し、粘土場の観察(ドキュメンテーション)をもとに、教育プログラムの開発を行うこと」⁽²⁾を目的とし、レッジョ・エミリア・アプローチを下敷きに、場を構成する目的や内容、方針や観察方法のポイントを提示した。環境設定については、物的環境と人的環境の二つについて示されている。まず物的環境についてであるが、上記の粘土の設定に加え、粘土の状態を維持するための土練機、クレイカッターや土搔き、延ばし棒、へらなどの道具も用意したとされる。人的環境については、粘土場の実現と維持に向けた園長の認識と保育者の管理業務を重要視し、保育者への情報提供、情報共有、観察者や保育者のデジタルコンテンツやノートなどによる活動記録、参観日を活用した保護者への理解の促進を要点としている。また、環境を活用するため、活動中や活動以外の時間で土練機を使用し、使用可能な粘土のサイクルをつくることも、支援者によってなされる管理業務のひとつとされていると推測できた。活動中は、幼児の主体的な表現を阻害せぬよう、言葉掛けを最小限に抑え、したい活動の支援を徹底したことが示されている。その際、プログラムが用意されたとされ、粘土を対象とする身体遊びと、粘土を素材とする造形遊びの二種類の例を提示している。また活動の最後に、湿度を保つための片付けや、子どもたち主体となった片付けを行うことも挙げられており、これも支援者により支

援や指導される点であると考えられる。これらのことより、粘土場における人的環境は、活動における環境を構成する存在の一つとしての役割と、環境を維持し活用するための役割の、二種類の役割を担っていることが推察された。

粘土場の環境とそれによる実践がもたらした成果として、生育環境の改善、粘土造形に特化した空間による安心感の付与が挙げられている。また、粘土場による活動が幼児にもたらした効果について、集中力や対人関係の能力向上、全身で遊べたこと、協力して遊べたこと、幼児の量感の意識による動勢の表現や身体性に基づく量的な空間認識の獲得などが挙げられている。さらに、これらの結果を先行研究より裏付けし、粘土場の価値を確固たるものにした。この研究以降にも粘土場に関連する研究がなされ、幼児造形教育の発見や発展に寄与した。

身近に多量の粘土が存在する場を設け、日常的な運営や管理を行い、幼児の粘土による表現の多様性にも柔軟に対応することのできる活動を設定したことは、非常に画期的であったといえる。粘土を遊びの一つとして生活空間の中に取り入れることにより、ワークショップのような単発的で、作品の完成が目標となりやすい活動ではなく、連続性のある活動が行える。それにより、幼児の造形活動のプロセスを見守ると同時に、内発的動機づけにつながり、粘土への親しみや自己表現の広がりを生むことができるのではないかと考えられる。また、経験や環境に起因した、粘土に対する抵抗感を払拭できる可能性がある。多量の粘土を用いる点と道具の使用について検討されていると推察できる点は、1で挙げた支援や指導のポイントと共通する点であることが再確認できる。

以上のことを踏まえ、先行研究で示された環境設定や、その独自の環境の下で行われる活動の実態を調査することで、物的環境を中心に、幼児の発達に沿う造形活動の支援のポイントを具体化できると考えた。

3. 研究方法

先行研究を基に、多量の粘土を用いることのできる造形活動の場である「粘土場」を設置してい

る岡山県高梁市高梁中央保育園にて、活動内容や環境設定についての調査を行い、調査結果をまとめ考察した。

調査は、2014年8月4日9時30分から12時30分の5歳児クラスの粘土遊び、同日13時30分から14時30分に行われた粘土場に関する研修会、2014年9月3日13時30分から約1時間行われた4歳児クラスの粘土遊び、2014年9月4日9時30分から約1時間行われた3歳児クラスの粘土遊びへの参加、観察を通して行った。活動には粘土場を設定した前嶋も参加した。活動中の様子はビデオカメラで記録した。

4. 調査結果と考察

(1) 調査結果

まず、先行研究の実態と物的環境について述べる。粘土場は先行研究で設定された基本的な物的環境を保ち、幼児の「一年中多量の粘土と自由に遊べる場所」としての役割を十分に担っているものであった。調査中、活動で実際に見られた幼児の姿は、先行研究で提言された粘土造形における発達の姿と合致する点が多く、粘土場が幼児の自由な表現を支援していることは明白であった。それに加え、粘土場のその目的や他に類を見ない環境によって、イメージの広がりや、あらゆる表現や欲求を支えられていることによる安心感、知覚や好奇心の刺激、それに伴う思考や行動の促進、集中力の持続、粘土と幼児の密接で良好な関係性づくり、自発的で発展的な環境の意味や価値の利用などが生まれている様子が見られた。したがって、幼児の発達の姿を受け止め、発達の中で培った能力を引き出し、促している様子が見られ、この多量の粘土を用いる造形活動の有意性は確実なものとなった。

さらに、活動時間内の主体的な遊びの発展やその連続性に重点が置かれていたことから、粘土場における活動は、指導的な側面よりも保育的な活動としての側面が強く表れていた。同時に、粘土の最初の配置などの物的環境のバリエーションを増やすことによって、活動の幅を広げられる可能性も考えられ、幼児の主体性を損なわないかたちで導入や環境設定を変えることで、その意味や価

値を変化させることもできる柔軟な場であることも分かった。

粘土場活動の調査結果の詳細については、文末の表-1を参照する。

次に、先行研究でも述べられていた人的環境についてである。活動中の支援者の様子については、「多量の粘土で園児に自由に遊んでもらう」という目的の下、活動内容に関して保育者同士でその目的やそれに準じた支援の共通理解を図りながら支援を行っていた。園児たちの主体的な活動、遊びの発展や連続性などを支援する様子が見られた。この詳細についても文末の表-1を参照する。

保育者に向けて調査期間中に行われた研修会では、主に「粘土場の管理や実践に関する諸説明」と「粘土場を用いた保育や教育」についての内容が取り上げられた。「粘土場の管理や実践に関する諸説明」においては、粘土場の環境設定や活動の流れ、保管方法や土練機の使用方法について具体的なポイントが示された。ここでは、粘土場の活用に向けて、やはり保育者の管理や運営が重要となることから、片付け方法や土練機の使い方などの環境維持に関する、支援の上での負荷をできる限り軽減するためのポイントを紹介する場面も見られた。記録に関して、先行研究ではデジタルコンテンツと紙媒体による記録が設定されていたが、状況によって差が生まれるため、記録の充実に向けた記録用紙の検討を行っていることも分かった。物的環境と人的環境の二つの要素の充実によって環境設定が成り立つことや、それぞれの重要度の高さが改めて示唆された。「粘土場を用いた保育や教育」についての研修では、研修会の目的として、「簡易な準備片づけとともに粘土遊びをさらに活発に行うことの推進」、「子どものプロジェクトを考え継続することの推進」、「活動中の定点による見守り」、「簡単な記録を行い、子どもに見えるようにし、保育者自身が観察と記録を楽しむこと」の4点が設定された。内容については配布資料と合わせて、「環境による教育」、「多量の粘土を用いる活動の有用性」、「自己対話・他者対話・物質形態・身体運動・道具使用・伝達行為の発展」、「粘土場を行った後の園児の絵の変化」、「マトリクス⁽³⁾の設定による園児の主体的

な環境利用」、「わかりたい気持ちを大切に、つくりたい気持ちを、全身を使って自由に開放する場」、「遊びに始まって遊びに終わる粘土場活動」の7点などについて取り上げられた。これらは前嶋の研究を基にした内容が主となっていた。

このような会を通して、保育者同士の粘土場についての共通理解を促し、粘土場の更なる活用の推進と、活動中の人的環境の充実を図っていた。これは先行研究でも重視された、設置する場の支援者や保育者における粘土場への認識、粘土のサイクルや粘土場の状態維持などの物的環境の管理や運営、情報共有、研究者との検討などによる保育の共同、また、保護者への公開のための記録などに向けた内容であると考えることが可能である。

(2) 考察

まず、物的環境について述べる。

先行研究とその実態を踏まえると、多量の粘土の価値は明確である。具体的な量についてであるが、調査時、使用可能な粘土はおよそ800kg用意されており、幼児は一人当たり40～80kgの粘土が使用できた。その結果、その量が発達の姿を支え、安心感を生み、発達の中で培った能力に働きかけ、引き出し、自発的で発展性のある活動を支えたといえる。また、それは幼児が全身で遊ぶために不足の無い量であり、集中力を高め、持続させ、一人の遊びや協同的な遊びへの発展、流動的な活動の発展、様々な表現や造形物の具現化に確実に対応していた。実際に達成感を味わう様子も見られたことから、個々の欲求解消につながったことも考えられる。これらのことを考慮すると、幼児一人に対して、少なくとも幼児の平均体重⁽⁴⁾とほぼ同じ量である20kgから、その2倍の40kg以上の粘土が必要となるといえる。

次に、物的環境の具体的な設定についてである。多量の土粘土を継続的に用いる活動では、粘土槽や土練機などを使って定期的に粘土を適した固さにする整備は不可欠であり、それには、そのような設備の充実と連続的な管理が求められる。それゆえ、このような活動を日常的に行う場合は、それに伴う設備は確実に設置する必要がある。粘土の固さの設定に関しては、調査中の活動では、環

境の中に具体的な複数の固さの意図的な作り分けは行われていなかった。先行研究の支援のポイントのように、意図的に固さを数種類作り分けておくことは、幼児の活動の幅を持たせ、体験を豊富にする意味では有用であるが、幼児の活動を無意識に誘導する可能性もある。また、粘土の状態によっては支援者の負担の大きい遊びに成り得る。よって、自由に遊ぶことを重視していた今回の活動においては、時間のサイクルの中で自然に変化する固さを体験することに留まっていた。これは、生活範囲内の特定の場所にこのような設定をしている環境ならではの体験となり、そこに十分な価値があったといえる。このことから、粘土の固さを作り分けることに関しては、時間による状態変化を楽しむことも、活動の変化を視野に入れた、幼児が使用を選べる意図的な設定も、どちらもそれぞれの効果や有用性が考えられるため、更なる検討の余地がある。

最後に道具の使用についてである、粘土の量が多い場合は、粘土の切り分けなど、道具の使用は必然となる。よって道具の使用に関しては、手だけでは難しい操作を援助する目的で、その機能について発達の様子を見ながら教示し、その後の使用については幼児の要求に応じて支援し、幼児が安心して活動に臨むために数には十分な余裕を持たせることが重要となる。発達の度合いによっては、道具の使用を制限することも有用であるといえる。

次に、人的環境について述べる。

まず、活動中の支援者の様子についてである。幼児の主体性を尊重するため、安全に留意した上で、指導的な言葉掛けや誘導は行われなかったことはどの支援者にも共通していた。その中で、複数の支援者で定点にいる役割と活動の中に参加する役割が分担されていたり、保育者が定点にいる状態と参加する状態を使い分けていたりする様子が見られた。保育者が定点の人的環境として存在することの意義として、積極的な介入に比べて、活動を見守りつつ幼児の自発的な活動を尊重でき、主体性をより高めることができることが考えられる。一方で、支援者が活動に参加し、幼児とともに楽しむ活動も、調査中に造形的活動の初期

段階にいる幼児が他者の模倣によって自分の造形表現を試行錯誤する様子があったことや、粘土に対して距離を置きやすい幼児が保育者とともに粘土遊びを楽しむことができる様子があったことから、その有用性がうかがえる。粘土場では、保育者も活動に実際に参加し、人的環境として構成されていたため、活動中の幼児は、他の幼児は勿論、信頼関係の築けている保育者とも積極的にコミュニケーションをとり、盛んにフィードバックを求めたり、そこから発想を得たりする姿もあった。支援者の影響を強く受けたり、支援者主体の活動が誘発される可能性も孕んでいるためその在り方には十分な検討が必要だが、幼児の主体性を守りながら支援者が一緒に参加して楽しむことで、幼児がさらに安心して自分の欲求を発散したり、表現を楽しんだり、もっている力を発揮したりすることができ、環境を充実させることにつながる可能性は十分に考えられる。この人的環境の二通りの在り方にはそれぞれの利点があるため、明確な支援目的をもってこれらの支援方法を考慮し、人的環境の在り方を追求することが重要であるといえる。

物的環境と人的環境は、ともに環境を構成する重要な要素であることから、その関連性の強さは想像に容易い。物的環境の初期設定と活動の導入は支援者によって成される。支援者が粘土の設置や言葉掛けなどをシンプルに設定する場合と、調査中見られたように意図的に粘土の配置や形を設定する場合は、導入やその後の活動に違いが生まれると推測できる。したがって、物的環境はそれを利用する人的環境によって効果が変化する可能性があり、それにより、導入や活動の幅を広げ、活動の目的に合わせた支援の充実を図ることができると考えることは妥当である。

また、粘土場の管理や運営、活動記録などの環境づくりにおいて、場の維持や有意義な活動が、支援者の管理や情報共有によって成り立つことは明白であった。このような造形活動では、幼児の流動的な造形の様子が如実に現れやすいため、幼児の造形活動において重要となる過程を見守るためには、活動の記録も重要である。しかし、それが必ずしも簡易であるとは言い難い現状は想像に

難しくない。よって、調査中の研修会でも管理にまつわるポイントの提示があったように、多量の粘土を生活空間に配置する場合は、支援者が活発に多量の粘土を扱う場を利用しやすく、かつ支援者優位の利用にならず、活動の目的に応じた物的環境の整備のポイントを提示する必要がある。支援者によって活動や管理に違いが生じやすいため、条件付けの行える事柄については可能な限り普遍的な条件を設定し、それを基に情報共有や検討を行うことで、粘土場のより効果的な活用や支援に役立てることができると考えられる。

以上のことから、幼児の粘土造形の効果的な支援を行う際、有用性があると考えられる環境設定については、次のようにポイントを具体化し、新たな課題を焦点化することができる。

物的環境については、以下の4点が挙げられる。

- ① 幼児一人当たり 20kg ～ 40kg 以上の粘土を扱える環境設定
- ② 多量の粘土の継続的な使用に際する、粘土の状態維持のための設備
- ③ 時間の変化による粘土の状態変化の利用や、意図的な固さの作りわけによる、粘土の様々な状態を体験する活動に対応できる環境設定
- ④ 多量の粘土を扱うための十分な道具の用意と、その効果的な利用のための教示、選択できる道具の提供方法の設定

人的環境、特に支援者の支援方法については定義付けなどが難しいため、活動の目的に応じた支援者の在り方のポイントをさらに具体化することが今後の課題と成り得る。

物的環境と人的環境については、以下の3点が挙げられる。

- ① 目的に基づいた支援者による物的環境の効果的な利用方法の検討
- ② 物的環境を設定、管理、運営する際の普遍的で簡潔なポイントの明確化
- ③ 活動記録の充実や、それによる活動の検討や改善

先述したように、多量の粘土を用いることができる環境は、指導的な側面よりも保育的な環境としての側面が比較的強くみられる。同時に、物的環境の変化により活動の幅を広げることも可能

で、幼児の主体性を尊重しながら導入や環境設定を変えることで、その意味や価値を変化させることのできる柔軟性の高い場である。また、調査中の幼児の姿から、このような環境を活用した、幼稚園指導要領で定められている「生きる力」の基礎となる心情、意欲、態度、それにつながる「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5つの領域に関連する幼児それぞれの発達の実態把握や、発達の度合いや個性に沿った発達の支援が行える可能性が示唆された。このような環境設定は、幼稚園教育要領において幼稚園教育が「環境を通して行うものである」という点にも関連しているといえる。したがって、造形活動の目標設定と今回見出した環境設定のポイントを相互作用させ、その充実を図ることで、さらに支援の幅が広がり、造形活動が発展するといえる。

5. おわりに

今回の研究では、幼児の多様な発達や表現の姿に沿い、効果的な支援を行うことのできる粘土造形の環境設定について、実際に多量の粘土を用いた環境設定及び活動を行っている「粘土場」の実際の環境設定や活動内容について調査を行い、その支援に関する具体的なポイントを見出し、支援や指導の足掛かりにすることを目的とした。その結果、多量の粘土の使用ならではの活動の利点や成果を検証するとともに、その価値を明確にし、物的環境を中心とした環境設定におけるポイントを明らかにすることができた。また、このような環境設定を様々な視点から用いることによる、幼児の発達に沿う支援に向けた、新たな支援方法の提案の可能性を見出すこともできた。

調査時の聞き取りより、他の地域においても粘土場に類する活動が行われていることが分かり、このような活動の価値に注目が集まっていることが読み取れた。このことから、このような活動の利点を活かした粘土造形の活動の提案は、幼児の造形活動やそれによる発達支援のさらなる発展に寄与できることが推察される。

しかしながら、人的環境や支援者による支援の在り方のポイントの具体化には更なる研究の余地がある。環境設定における人的環境は、活動に大

きな影響を及ぼす重要な存在でありながら、その構成要素は複雑で、定義付けが難しい。したがって今後の研究では、人的環境のポイントの具体化に向け更なる追求を行うことが課題となる。併せて、幼児の実態把握や伸ばしたい力に応じた目標設定、それに伴う環境設定の効果的な活用方法の検討を視野に入れ、多量の粘土を用いる造形活動における人的支援の在り方を探究したい。

謝辞

本研究の調査にあたり、岡山県吉備国際大学文化財学部アニメーション文化学科の前嶋英輝先生、ならびに、岡山県高梁市高梁中央保育園の皆様にご協力をいただきました。貴重なお時間を割いていただき、心より感謝致します。

注

- (1) 三浦乃 (2015), 粘土を用いた幼児の造形活動の発達に関する研究—土粘土による表現に着目して— 鹿兒島大学大学院教育学研究科修士論文 (未公開)
- (2) 前嶋英輝「幼児造形教育のための粘土場による実践」順正短期大学研究紀要第36号, 2007, pp.71-77 p.71
- (3) マトリクスとは、粘土場においては、最初の粘土の位置のことを指している。配布資料では、マトリクスと声かけをあわせて、幼児を感覚的、または造形的関わりに変化させることができるということが示されている。また、様々なマトリクスによる影響の差が追究され、実際にそれによる活動の傾向の違いも明らかとなった。基本的にはシンプルなマトリクスと導入から生まれるイメージが試行錯誤とともに造形思考につながると考えられている。
- (4) 「厚生労働省
<http://www.mhlw.go.jp/index.shtml>,
 「厚生労働省：21世紀出生児縦断調査（特別報告）結果の概要
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/tokubetsu/index.html>
 (2015年9月11日)

参考文献

- 神谷睦代「幼児の粘土造形－基礎的な技能の習得
及び題材（テーマ）についての実践と検証－」
美術科教育学会誌第 30 号，2009.
- 大学美術指導法研究会 編『新学習指導要領によ
る図画工作科指導法 理論と実践』（日本文教
出版株式会社，1999）
- 前嶋英輝「幼児造形教育のための粘土場による
実践」順正短期大学研究紀要第 36 号，2007，
pp.71-77
- 文部科学省『幼稚園教育要領解説』（株式会社フ
レーベル館，2008）

表—1 粘土場における活動の詳細

	8/4 5歳児クラス (10人)	9/3 4歳児クラス (約20人)	9/4 3歳児クラス (約20人)
環境設定	園の別館につくられた粘土場には、ブルーシート、ビニール、梱包材などが敷き詰められ、その上に粘土 800kg 程度の山 (粘土槽にある粘土を含めると 1.5t 程度) が一つ用意されていた。奥には粘土槽と土練機、道具 (粘土板、かきだしべら、クレイカッターなど) が用意されていた。 クーラーなどで室内温度の調整をしており、固さの種類分けなどは特別に設定されてはいなかった。これは時間の経過によって粘土が乾いたり、または粘土槽から取り出すタイミングにより柔らかい粘土を使用したりとすることで、環境の中に自然な固さのサイクルをつくることができているからではと仮定することができた。 園児の服装は汚れてもよい服で、裸足で参加していた。	導入前の環境設定として、4歳児、3歳児クラスでは、粘土の大きな山ひとつだけでなく、近くに土練機で練った円柱状の粘土やレンガ状の粘土を複数個置いていた。そのため土練機でつくられた円柱状のきれいな粘土に園児が殺到する傾向が見られた。 道具の使用は行われなかった。人数や発達の度合いに応じて使用を制限していたと考えられる。	前嶋は粘土場における道具の使用について、基本的に手を使う活動を行うことから、最小限の道具しか取り扱わないとしていた。取り扱っている道具は主にクレイカッター、土搔べら、粘土板であり、多量の粘土を用いる際に、粘土を切り出すことや手だけでは難しい操作を援助する目的で用いられる。使用する際には人数より多い数を用意し、粘土とともにそれらがいくらかでも使えるという安心感を与え、活動を保証している。 研修会では、用意された道具を使用する際、園児に必要なかどうか確認を取り、主体的に使えるようにするというポイントが挙げられた。
目的	5歳児クラスは欠席者がいたため 10人程度での活動であった。そのため、一人当たり 80kg の粘土を使用できたことになる。 道具の使用に関しては、年長児クラスであったため、比較的、機能的に使用する様子が見られたが、園児によってはそうでない場合もあった。しかし、そのような際に指導をすることはなく、活動の発展を見守ることが主となった。主に、使用目的の分かりやすいクレイカッターを使いこなしている園児が多く、道具を使用させる際にはその機能を十分に強調することの重要性が明らかとなった。	多量の粘土で園児に自由に遊んでもらうという目的はどのクラスにも共通しており、活動内容に関して保育者同士でその目的やそれに準じた支援の共通理解を図っていた。最初の粘土の位置や形状、園児自身のもつ思いやイメージをもとに、園児たちが主体的に活動を行い、遊びの発展や連続性を大切にしている様子が見られた。	保育者の判断により 1 時間程度で活動を終えた。
時間	園児の活動への意欲、集中力が高く、3 時間ほど活動を行った。	保育者の判断により 1 時間程度で活動を終えた。	保育者の判断により 1 時間程度で活動を終えた。
支援者の様子	前嶋と担任の保育者の 2 名で行われた。 前嶋は活動を外から見守るように複数の定点に立ち、保育者は園児とともに活動に参加していたり、写真記録を撮っていたりした。指導における取り決めはなく、前嶋より園児、保育者ともに自由に活動することが設定されていた。 「定点による見守り」については、研修会にて、レジオ・エミリア・アプローチにおける保育者の在り方や、新宿せいが保育園の「見守る保育」の内容が取り上げられたことから、これらとの強い関連性がうかがえる。前嶋は「定点にいる保育者」(見守る保育者)となり、園児からの問いかけなどに応じたり、場合に応じて、環境設定の変更や充足を行ったりする以外は、特に造形に関わる様子は見られなかった。担任の保育者は園児とともに活動を楽しみ、園児から活動を引き出したり、自然な会話を行ったりしていた。支援、指導的な観点と同時に、ありのままの雑談のようなやりとりも見られた。前嶋のような関わりにより、園児の主体性や想像力を阻害することなく活動の発展を見守り、保育者のような関わりにより、園児がリラックスしながら、自然に粘土と関わることを支援していた。どちらも、園児にあった支援や指導を考える上で必要となる関わりとなると考えられた。	前嶋と担任の保育者 2 名、実習生らしきスタッフも参加しており、計 4 名。	
導入・終末	【導入】 園児たちは 2 回目の粘土遊びであった。前回の時点で、『粘土を投げない』という約束事のみを取り決めている。約束事を簡素にすることは意図的に行われていた。 それぞれにやりたいことなど、過去の経験なども元にイメージし、導入における言葉掛けなどは最小限に行われていた。 【終末】 主体的な片付けの後、挨拶をし、そのままシャワー室へ移動した。	【導入】 粘土場での遊びは初めてであった。活動開始前の環境設定により、土練機をかけたきれいな粘土へと誘導される場面があった。 【終末】 主体的な片付けの後、挨拶をし、そのままシャワー室へ移動した。	【導入】 粘土場での遊びは初めてであった。そのため、好奇心から導入における約束などが身につくにくく、度々約束を確認する場面が見られた。 【終末】 主体的な片付けの後、挨拶をし、そのままシャワー室へ移動した。
園児の様子	活動が始まると、粘土の山から園児それぞれの遊びに向けた粘土との関わりが見られた。これまでの研究にもあったように、園児たちはおおまかに、感覚的な関わりを行うグループと造形的な関わりを行うグループに分かれたが、厳密に分かれたわけではなく、その園児一人ひとりの流動的な活動が見られた。時間がたつとともに粘土との関わり方や造形物が変化し、大きな作品が生まれたり協同的な活動が生まれたりなど、幼児の発達に沿うだけでなく、活動の主体性、発展性の高まりが如実に現れるものとなっていた。	このクラスの園児は、基本的な粘土との関わりから始まり、活動の始まりから基本形をつくる様子が見られた。活動内容は流動的で、園児の知覚で感じたこと、つくったもの、それを基にした操作、それらを通して感じ、つくる、という知覚と思考、行動の行き来など、連続性のある活動の様子が見受けられた。感覚的な活動と基本形をつくる活動が比較的多く見られた。 感覚的な活動を行う園児の様子として、	年齢的な発達の段階から、このクラスの園児の活動は主に感覚的な関わりであった。その中で造形物(基本形であるおだんごが主である。)が生まれており、感覚的な関わりとそれによって生まれた形や事象とイメージを行き来する様子もうかがえた。活動開始から 30 分程度たった後、前嶋によって土練機が使われた際には、練られた粘土を持ち上げる感覚的な関わりとともに、その円柱状の形にイメージをつくり、つなげて電車にし、先頭車両

<p>感覚的な関わりを行っていた園児たちは、粘土の山に体を預けたり、粘土を切り出し続けたりなど、粘土と自分の身体との関わりを味わいつつ、ごっこ遊びなどに発展したり、感覚を味わっていたりする様子があった。流動的であったが、後に複数の園児による大きなトンネルづくり（園児が通れる程度の大きさで、最終的に保育者やその他の保育者も協力した。）に発展し、大きな達成感を味わえる活動になった。この活動はやはり 800kg の粘土ならではの。</p> <p>造形的な活動を行っていた園児たちは、最初は自分が操作するための個体の粘土を持ち、いろいろなものを作ったり、つくる行為そのものを楽しんだりするなどしていたが、その後複数の園児が大きなひとつのモチーフ（案）をつくることに目標を定め、それに伴う対象物やイメージ物を造形していた。これもごっこ遊びと同時進行で行われることもあった。最終的に、こちらも園児が 2,3 人入ることのできる大きな造形物となり、想像力を刺激し、それを具現化する経過と実際の造形物の完成に達成感を味わえる活動となっていた。この活動の際には、保育者が積極的に補助し、モチーフ作りを手伝う様子が見られた。</p> <p>このクラスの園児はその発達の姿から、土練機を用いた際に切り分ける大きななどで揉めてしまうため、園児の前では意図的に使わないようにしているとのことであった。</p> <p>園児たちは非常に集中して活動を楽しんでいた。これは、粘土遊びそのものへの興味や意欲に加えて、多量の粘土を使うことができるという環境にも起因していると考えられた。多量の粘土を好きに使えるという環境に面白さや安心感があり、好奇心が掻き立てられ、その結果、操作やイメージを引き出し、欲求を解消したり、想像力をさらに膨らませたりすることができる。これは粘土場ならではの様子である。</p> <p>粘土場での活動では、他者との積極的なコミュニケーションの様子も観察できた。このクラスでは、先行研究にも見られた年長児ならではの自然発生的な共同遊びが見られた。その際、同じ造形物に向かう園児の集団において、造形意図や関わり方の差や違いにより一時的に他者と距離が開いてしまう園児がいても、園児同士でコミュニケーションをとり、最終的につくる活動にみんなで行い、出来上がった造形物を通して遊ぶことができていた。多量の粘土とその可塑性は、試行錯誤しながら造形を行う園児たちにとって非常に安心できるものであり、発達や様々な生活経験を経て獲得したコミュニケーションや課題解決の能力を支え高めることのできるものであることを再認識できた。同時に、保育者はその自発的な活動を損なわない支援を行うことが大切であると考えられた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 山に登る、足で踏む園児が多く、その後のような痕跡が多い。 ・ どれぐらい大きな粘土をもてるか、など、身体に密接な関わり。 ・ トンネルづくり（5 歳児クラスほど本格化はしなかった。）などがあり、 <p>造形的な活動をする園児の様子として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本形と反復お造形物。 ・ モチーフに多少の性差。 ・ 先生が手伝った造形物を元に試行錯誤する様子。 ・ など生活に根付いたものをつくる。 ・ お店屋さん ・ 非常に量感があり具象的な造形物を作っている男児二人がおり、作品として迫力があつた。 <p>などの特徴があつた。</p> <p>粘土量が多い分、様々な造形物や活動に発展しやすく、選択肢が広がるというのが粘土場の魅力であるといえた。また、粘土場は粘土が多量である分、身体と粘土が密接な関係性を築いており、ネックレスやアニメの腕時計型アイテムなど、ただ対象物をつくるだけでなく、それを身につけるなど、粘土への抵抗感を和らげている様子が見られた。しかし、その中でも粘土を極力触らない園児もいた。</p> <p>このクラスでは、ある保育者が活動への参加と定点に居る状態を使い分けていた。</p> <p>園児の保育者や友達へのフィードバックを求める様子も盛んで、他者の造形物の簡単な觀賞や、自分や他者の造形物における価値の共有も積極的であった。また、保育者のフィードバックによる更なる活動の誘発や発展が見られたため、その影響力の強さや重要性が再確認できた。環境設定としての人的環境の在り方はポイントとなるといえる。</p> <p>それに関連して、保育者と造形物をつくる園児もいたが、保育者の造形物が平面的であった場合、園児の造形物も平面になるなど、保育者の造形物の影響の大きさも再確認した。園児の安心感を支えつつ主体的な活動を引き出すための、活動の目標に沿った支援の十分な検討も重要である。</p>	<p>に特徴づけをするなどの遊びに発展していた。また、土練機から出てくる粘土の動きを利用した遊びも見られた。</p> <p>思考と形、造形意図は他のクラスに比べるとあまり見られない印象であった。造形的な活動をしているように見受けられる園児もいたが、具象性の点では更なる発達の余地が考えられた。</p> <p>活動で見られた関わりの様子として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 積み木のように塊をのせていく。 ・ 見立てが多く、見立てを通したごっこ遊びなども見られた。 ・ トンネル掘り。また、その穴へのイメージの付随。 ・ どれだけ大きな塊が持てるか。 ・ 足で踏んで粘土をわたる。 <p>などがあつた。</p> <p>女兒において細かい造形物をつくっている園児もおり、この段階での性差による造形物の差も見られた。</p> <p>4 歳児クラスと共通して、大人に造形をお願いするという手段を用いる園児も見られた。保育者が活動に参加できる粘土場活動ならではの。この手段やその模倣を通して、園児は他者の造形物からつくりたいものをつくるためのヒントを得て、具現化を試みているのではと推察され、造形的活動の初期段階にいる様子が推察された。</p> <p>活動中、粘土を取り分けるということが難しい場面があり、園児同士の激しいやりとりなどもしばしば見受けられた。そのため、活動自体は雑然としていたが、年長児の様子を考慮すると、これは年齢的な発達や生活経験とともに、継続的に粘土場を使用することで変化、発展すると考えられた。これより、粘土場独自の環境を通した他者とのコミュニケーションや集団性に関わる発達支援への可能性が推察された。</p> <p>活動中、やわらかい粘土（泥状）の粘土を粘土槽から取り出した園児がおり、それを触って「気持ち悪い」と感想を述べたり、パックのように全身に塗ったりする園児がいた。その後、後者の関わり方が誘発され、髪の毛まで粘土だらけになった園児もいた。この活動は園児の経験の糧になるといえるが、保育者への負担が大きいことや、粘土の固さの調節における現実的な問題を予見させるものでもあつた。</p>
---	--	--